

私たち人間は、たくさんの文や文字に囲まれて生活している。身の回りには、それらを使った、本、標識、建物、食品の表記など数えきれないほどの文や文字が、私たちの役に立ち、支えてくれる手助けをしてくれている。よって、文や文字は、人間にとってかせないコミュニケーションの一種なのだ。

そんな様々な文や文字に囲まれている私たちだが、それは「見れる」ことが前提にあって、目が不自由で文字が見えない場合、文字の役目は果たせないことになる。

先月、親戚の叔父さんと一緒にショッピングモールに遊びに行く機会があった。私の親戚の叔父さんは、目が不自由で私たちが普段見ているような視界がはっきりと見えていない。しかし、叔父さんは、私を連れて服を買ったり、ご飯を食べたり、雑貨用品を見たりとたくさん遊びを満喫した。叔父さんが率先して私を引っ張ってくれた行動は「目が不自由」というハンデを感じさせる行動ではなかった。その姿にかっこいいという憧れを持った。後日、また親戚の叔父さんに会う機会があった。そのとき私は、前に遊びに行った時に目が不自由にも関わらず、なぜ、率先した行動をしてくれたのか疑問があったので聞いてみることにした。すると、叔父さんの答えはたった一つだった。「点字が私を助けてくれた」と。そう言われてみれば、一緒にショッピングモールに行ったとき、通路にあった掲示板を見て触っていたのをふと思い出した。そして、叔父さんは笑顔で私のいる方に近寄ってきて、次の目的地までの案内をスムーズにしてくれた。

私は、文や文字は人間にとって非常に役立つものと思っていたが、それは目が不自由な人たちにとっては自然なことではないことも考えていた。しかし、この叔父さんとの経験を通して、点字も文や文字の一種で、それらは人間の役に立ち、いつでも助けてくれるという役割を果たしていることが明確にわかった。また、それらは、見るだけでなく、触って判断するという方法もあるのだと実感した瞬間であった。そして、文や文字の多様さに驚き、面白みも感じた。

私たち人間は、たくさんの文や文字に囲まれ、助けられて生活している。私は、その多様な文や文字の姿に「ありがたみ」「暖かみ」を感じる。多様な活用のしかたがあるおかげで、人と人との関わりが連携され、経済が回っているといっても過言ではない。

「文・文字」とは、人と人を繋ぐ架け橋となる素晴らしく、かけがえのないものだ。今、現在でも、新しく生み出されている文字が数多くあるなかで、私たちがその場で出会う文や文字を大切にしていきたい。そして、長い時間をかけて後世に伝えていきたい。なぜなら、それは私たちが生きているなかで、多くの場面で私たちを支え、助けてくれた「文・文字」だから。